

(I)

問 1. 60° N 付近は比熱の小さい大陸が東西に広がり、最暖月の平均気温が 10°C を超え最寒月は -3°C を下回る冷帶気候となることが多いが、60° S 付近は大半が海洋で、気温の年較差の小さい海洋性気候となり冷帶気候は分布しない。また、冬に発達するシベリア高気圧やここから吹き出す乾燥した季節風の影響が強いシベリア付近のみが Dw となる。(156 字)

問 2. 雨季と乾季が明瞭で降水量が少なめの気候である。主に伝統的・自給的な農業が営まれ、小麦のほか、アワ・モロコシなどの雑穀などが栽培されているが、綿花や落花生など、乾燥に強い輸出用の商品作物栽培もみられる。(100 字)

問 3. 回転するアームで地下水の散水などを行うセンターピボットによる灌漑が行われ、多数の円形農場で小麦やトウモロコシなどが大規模に栽培されている。近年は過剰な汲み上げによる地下水の枯渇や塩害が問題化している。(100 字)

(II)

問 1. 本州東方の太平洋では、暖流の黒潮と寒流の親潮が潮境を形成し、暖海魚も寒海魚も回遊し魚種が多い。日本海には大和堆などのバンクがみられ、カニなどの水揚げが多い。北海道沖の北太平洋ではサケ・マスなどの北洋漁業が盛んである。このため、日本では生食や加工食品などの魚食文化が育まれて水産物需要が多いうえ、食品加工技術やコールドチェーンの発達、都市部における需要増などにより日本各地に出荷でき、都市部から遠くとも好漁場として漁獲量が多い。(213 字)

問 2. 海面漁業と内水面漁業は、排他的経済水域の設定、エルニーニョ現象によるアンチヨビーの漁獲量減少、マグロをはじめとする乱獲による資源量減少、漁獲量規制、漁場の汚染などにより、1980 年代からほぼ横ばい傾向にある。海面養殖業と内水面養殖業は、主に東南アジア諸国における輸出用エビの養殖拡大、ノルウェーやチリにおけるサケの養殖技術向上や開発輸入、新興国の所得増加による需要拡大などを背景に、1990 年代以降生産量が増加傾向にある。(207 字)

問 3. 津波でカキ養殖施設を流された宮城県に、西日本最大のカキ養殖地である広島県が施設や稚貝を提供し、人材を派遣するなど、ハード面・ソフト面を組み合わせた総合的な援助が行われた。原発事故による風評被害対策も官民一体となって行われ、国内流通や輸出の回復が図られた。漁業を継続するための支援金や融資なども重要である。(152 字)